浜松中納言物語注釈覚書

中西健治

その一　「山階寺」の記事など

巻一は中納言が唐土に到着し、都に赴く様の描写から始まっている。もちろん初めての土地で、「温嶺といふところに」（『新編日本古典文学全集』三一頁。浜松の本文は本書による。以下同じ。）とか、「杭州といふところ」（三一頁）、「歴陽といふところ」（三二頁）、「華山といふ山」（三二頁）等々、固有名詞を「といふ」で受ける表現が頻出している。このことはおそらく、中納言の視点からは馴染みのないものであるという意味合いが籠められていると解してよいであろう。唐土での記事に見える二つの寺についても同様で、「蜀山といふ山寺」（四五頁）、「菩提寺といふ寺」（六四頁）のように表記されていて、これらはいずれも中納言と唐后とを結びつけるのに深い関わりのある地でもある。これに対して巻二以下の舞台となる日本での寺は巻四に「山階寺なる僧どもの中に」（二九三頁）、「おこなひに山寺にこもりたる」（三〇四頁）とある他には、「清水に忍びてこめたてまつり給へるを」（三七二頁）として巻五にかけての舞台となる清水寺以外に見られない。特定の寺をさすのではない二例目は除くとすると、実際には「山階寺」と「清水寺」の二寺しか物語に登場していないことになる。清水寺はたんに「清水」とのみ表記してさほどの違和感もなく理解されるのと同様に、「山階寺なる僧どもの中に、さもありとおぼしき、召しにつかはして」と、山階寺を物語の中に取り込むに特段の改まった意識がなされているようには見えない。さらにいえば、ごく日常の延長上の場

としてあるかのような扱いにさえ思えてくる。果たしてそれだけだろうか。

山階寺建立説話

巻四、中納言は九月中頃から吉野尼君の夢を頻りに見、気がかりになって十月一日に吉野を訪れる。案の定、彼女は病に臥せっていた。驚いた中納言は尼君の病を治癒するべく高徳の僧を呼び寄せるというのが、さきの記述の一部であった。再度引用しておこう。

山階寺なる僧どもの中に、さもありとおぼしき、召しにつかはして、日々に尊きことどもを言はせて聞かせたてまつり給ふ。仏供養し、聖の弟子どもなどして、宵、あかつきに、懺法阿弥陀経など読ませ給ふ。枕近うて、声尊き僧どもして、経の声絶えず読ませて聞かせたてまつり、　（二九三・二九四頁）

「山階寺」について『古典全集』の頭注には、「奈良興福寺の別称。藤原鎌足の遺志により山城国山科に創建した山階寺を起原とし、藤原京に移されて厩坂寺、平城京に移されて現在の興福寺に改められたという。法相宗。」とあり、枕草子や今昔物語集の用例、歌集詞書での「山階寺」「興福寺」の使用の別が付されている。「山階寺」の建立について決まって引用される三宝絵（下巻・二十八・山階寺維摩会）の話はこうである。藤原鎌足が病を治療するために新羅（百済トモ）の尼の言に従い維摩経読誦をし、問疾品講読によって病が癒え、後、不比等が山階寺を建立、維摩会を復活して勅会三会に発展したという一連の話である。この話の一つの核は維摩経読誦によって病が癒えたことであって、その維摩経とは一切衆生の病を救うことを根幹とする経（維摩経・文殊師利問疾品）であったということである。つまり浜松において山階寺なる高徳の僧を招いた中納言の行為は、たんに地理的に近距離にあるという理由からだけではなく、寺院建立の淵源に遡り、そこに付帯している文化的コードを探り当て選択された表現であり、この場面としては十分に相応しいものであったと読みとれるのではあるまいか。「山階寺」という箇所に詳注を施したついでに、

それが何故に「山階寺」でなければならなかったのかということにも言及しておくべきではなかったかと、既に自明のことかも知れないが、贅言を付しておきたい。実はそのような作業こそ必要なのではなかったか。先に「といふ」で受けない固有名詞であるだけに、作者の寺院への親昵感と作中への導入の意図を検討しておきたかったのである。

治療の様相の記事

ところで維摩会は宮中御斎会、薬師寺最勝会と並ぶ三大勅会の一つで、この講師を勤めた僧は僧綱に任じられる資格を有する者として重く扱われるほどのものであった。維摩会は十月十日から十六日までの七日間行われる。浜松の巻四の該当箇所は十月一日から数日間にあたっていて、あたかも維摩会の行われる直前の時日にあることがわかる。「日々に」とあることから、何日間かを尼君のために費やしているのである。しかも「さもありとおぼしき」僧を招聘し、「日々に尊きことどもを言はせて聞かせ」るというのでもある。山階寺にとっての最大の法会の準備をさておいても尼君のもとに赴き治療に専心する高徳の僧をたやすく呼び寄せることのできるほどの実力者で中納言はあったとでも言いたげでもある。もっとも山階寺では維摩会が粛々と執り行われたことであろうが、一方でそこの僧の効験もあってか、十月十五日の夕方、尼君は紫雲と香、音楽に包まれて忽然と往生することになるのである。三宝絵を受けた今昔物語集（巻十二・於山階寺、行維摩会語第三）にも、維摩経の読誦によって病の癒えた大織冠（藤原鎌足）はすぐに家の敷地内に堂を建てて、「維摩居士ノ像ヲ顕ハシテ、維摩経ヲ令講メ給フ。即チ其ノ尼ヲ以テ講師トス」（新古典大系・三・一〇五頁）ることが記されている。浜松に「尊きことども」とあるのは、あるいは維摩経のことをさすかと思われ、その講説をして尼君に「言はせて聞かせたてまつ」るとしていることから、維摩会七日間のうちの講問論義の形式を思わせるものがある（髙山有紀氏『中世興福寺維摩会の研究』六九頁）。一方で、吉野聖の弟子たちには懺法阿弥陀経を読誦させ「絶えず読ませて聞かせたてまつ」るのであるから、これとは自ずから別様の方法が講じら

れているのである。「日々に尊きことどもを言はせて聞かせたてまつり給ふ」、「経の声絶えず読ませて聞かせたてまつり」、「ことどもをせさせて、聞かせたてまつり給ふに」と尼君の聴覚に癒しの方策が種々講じられているのであって、浜松にまま見受けられる同語反復の筆癖としてのみかたづけられない描写ではあろう。

中納言の活発な行動

中納言の懸命の看護も甲斐なく吉野尼君は死去してしまい、その様に衝撃を受けた姫君は失神してしまう。尼君往生に途方にくれる人々の様相に、中納言は「しばし庭におりて、縁におしかかりて、雲のたたずまひ、満ちたりけるかをりも、音にこそかかることは聞きつれ、めづらかにあらたにあはれなることを見つるかなと、うらやましうかなしうおぼす」（二九六頁）のであった。ところがその後、毅然たる態度で僧たちに姫君への護身の法を施すように「縁に立ちながら」指示する。先ほどまでは「庭におりて、縁におしかか」っていた中納言は、ひらりと縁に立ち上ったと読まざるをえない。そう解することは無理なことではない。しかしながらこの後の記述は、彼が「縁に立ちながらのたまひて、おぼしつづくる」姿を記し、長々しい思案についての後に「かばかりわが心から、かうも思ひやすらひ、おり立てる、かなし、とおぼしつづくるに、よろづ知られ給はずのぼり給ひぬ」（二九八頁）とある。ここからは、思案をしながら実は中納言は再び庭に降りて行き、つい先ほどの尼君の往生の奇瑞に感動したもとの場所に立ち戻っていたのだと読まざるを得ないことになる。つまり縁と庭とを往復している中納言の実に軽快な立ち居振る舞いに驚きを覚えるのである。中納言がもとより行動的でなかったと言うつもりもない。また、それほど周章狼狽しているのだと解せないこともない。しかし多くの往生伝に記される類型的な話型に即して記述されている宗教的雰囲気の漂う場面において、感動に包まれている中納言がこのように右往左往しているさまは、厳かな立ち居振る舞いをこそ造型するのが相応しい場面と思われる中にあって、このような軽快な行動は、狼狽する様を克明になぞっている

とみるよりも、むしろ騒然とした状況に漂っている主人公の姿として滑稽な感をさえ伴っていると読めるのではあるまいか。その時空の様相と俊敏活発な行為との齟齬に一種の違和感を感じ、それが期せずして暗鬱な空気を和ませる働きをしているように思えるのである。

いまこれを可笑味のある表現と読みとれるものならば、このあたりに類似の表現がないものだろうかと考え、若干の検討を試み、覚え書きを加えた。

その二　可笑味について

浜松中納言物語の可笑味の少なさについては夙に松尾聡氏の詳細な検討（「更級・浜松・寝覚に描かれた可笑味に就いて」・『平安時代物語論考』所収）がなされており、これに加えるべき何事をも持ち合わせてはいない。松尾氏は狭衣物語の四十箇所にもわたる可笑味の場面の存在に比べ、浜松にはそれに匹敵するような箇所は数箇所しかなく、しかも質的にもはるかに劣っているとして具体的に説明を施され、「これによつて作者がいかに機智ユーモアの類と縁遠い天性の人であつたかが明らかになつたであらうと思ふ」（四一八頁）と述べておられる。物語のもつ思想や素材との関連性も関わるのかも知れない。ただ、文面を読む限りにおいて、さきにみた中納言の軽快な行動の描写のように、作者が記述の背景にひそかに潜り込ませている機知めいたものをも可笑味の一つと考えるならば、松尾氏が指摘されたもの以外になおいくつかをあげることができるように思う。以下、表現面について気付いた箇所を摘記しておきたい。

「逢ふ道」と「近江路」

巻三（二三）「中納言、唐后を回想し恋慕。吉野に便り」（『古典全集』巻・見出し番号と内容。以下同じ。）という箇所

を見ておこう。

中納言は唐后への思いの代償としてみ吉野にいる母娘の世話に十分な配慮をする。その中納言の行為に触れ、物語は次のように総括している。

多くの海山を隔てて、契りを結びたてまつりて、燃えわたる胸の炎、さむることには、ただこのことを片時おこたらずおぼしいとなみても、逢ふ道ならねば、何のしるしもなかりけり。　（二六三頁）

この「逢ふ道ならねば」という箇所。『古典全集』には「『逢ふ道ならねば』は、吉野路で『近江路ならねば』の意を掛けるか。」として、後撰集の歌「あふみぢをしるべなくても見てしかな関のこなたはわびしかりけり」を引いておられる。唐后への止みがたい思慕の情はやがてみ吉野にいる吉野姫君に移行することは、この段階ではまだ明確にはなっていない。むしろ唐后の母親である吉野尼君に対して唐后に代わっての孝養を尽くしているかのような行為ではある。孝養心は当然男女の恋愛とは異なり、また赴く先は吉野のさらに奥なるみ吉野である。近江路が「逢ふ」と掛詞にして用いられていることは多く、その多くは男女の恋愛を詠み込むことであった。引き歌としての後撰集の歌も恋の歌（巻十一・恋三・七八五）で、逢坂の関の手前、逢う直前まで来て逢わないことはつらいことだという気持ちを女に訴えているのである。『古典全集』注のように、「逢ふ道」を「近江路」に掛けて読んでみると、それは単なる掛詞ではなくて、巧みな機知があるのではないか。吉野への道は「逢ふ」とはほとんど正反対の世俗乖離の道であり、「近江路」ではないゆえに「何のしるしもなかりけり」ということにつながるのである。唐后を慕いつつも、あたかもその思いとは全く関わりのない吉野路に「片時おこたらずおぼしいとな」む中納言の行為は、真剣であればあるほど、焦点のズレに読者としての滑稽さを覚えるのではあるまいか。

類似語の応酬

巻四（一三）「帰京した中納言、尼姫君に吉野体験を語る」に、吉野尼君の往生の様相を具体的に語った中納言の言葉にいたく感動する尼姫君を見て、中納言は次のように言う。

「住まひの深き浅きにもよらじ。いづくにても、ただ心からにてこそあらめ。市の中にてこそ、まことの聖は無上菩提を取りけれ」　（三二四頁）

これに対して尼姫君は「いと深からぬ心は、住まひがらにこそ」と即座に応じ、そのことを中納言は「思惟仏道」をさすのだなと言っている。たがいに思っていることを率直に言い合う場面である。「いづくにても、心か（が）らにて」と言う中納言の言葉に、否、そうではなくて「住まひがら」こそ肝要だと尼姫君は応じている。中納言が宗教的観念こそが大切なのであると言うのに対して、それよりも現実の環境こそが大切なのだと尼姫君は言う。一見、きわめて高度な宗教論のようでもあり、もちろんそのように解釈することが好ましいのではあろうが、「心がら」という語例はあるが、「住まひがら」という語は他の作品にほとんど見当たらない。つまり、「住まひがら」という稀有な語は中納言の「心がら」という、一見おごそかに聞こえる語に反応して即座に案出された語であったのではなかったか。「市の中にてこそ、・・・」という発言の背景に空也上人を想起させる宗教哲理が続き、中納言の言葉に重みが加わることになる。しかし物語の現実は、世俗を離れるべく訪れたみ吉野での吉野尼君の往生と遺された吉野姫君への少なからぬ動揺の体験があり、それはほとんど仏道に即した深遠な哲理とはほど遠い姿勢であった。自らこそ出家の身となり仏道三昧の日々を送る尼姫君には中納言の心底が手にとるように見える。理屈では哲理を説くことができても実際の心はそれとは裏腹ではないのか。尼姫君は、中納言の言葉に即座に反応し、「心がら」と説く言葉に「住まひがら」と応じて反論し、取り澄ました中納言の言動をいわば茶化したのではないか。語構成としてみれば、「から」は接尾語で、「ものの『本質的なありさま』を意味する体言を構成したと思はれる」（阪倉篤義氏『語構成の研究』三七三頁）ものであって、「山カラ」「神カラ」「ハラカラ」「ヤカラ」などの語のように造語されていく。当然「住ま

ひがら」もその中に入ってこよう。心通う仲なればこそ、このようなあけっぴろげな応酬が可能になってくる。その見事なやりとりに機知を読みとることは必ずしも不適切なこととは思えない。

同音両義語の反復

巻四（一七）「道中、中納言は唐后との秘事を姫君に語る」に、中納言が吉野姫君に語ることば。

「そのゆかりと思ひわび、たづね出でたてまつりしなれば、かたみにそのゆかりとおぼせ。思ひ聞こゆるなり。かの御かたみの児のはべるところになむ、おはしますべければ、はるかなる御かたみとなむおぼすべきぞ」と長き夜すがら聞こえ明かし給ふに、（三三六・三三七頁）

ここでは中納言のひとまとまりの会話文の中に「かたみに」と「御かたみ」という語が連鎖するように用いられていることが注目されよう。

吉野姫君を京に連れ出す中宿りで、中納言は吉野姫君の姉にあたる唐后への思いを告白する。この問わず語りは体験を述べながら、じつは吉野姫君への思いを秘めたものではあった。右の引用文の直前には、「いとどしき涙はひとつに流れあひぬるも、かたみにいとあはれになつかし。」とあり、中納言と吉野姫君とは互いに心が通い合う仲だということを記している。つまり、地の文に「かたみにいとあはれになつかし」とあり、中納言の会話文中に「かたみにそのゆかりと」、「かの御かたみの」「はるかなる御かたみと」と連続して「かたみ」を繰り返していることになる。もちろん両語が各々「片身」、「形見」から発するという自ずからなる意味上の相違はある。しかしこのあたりの中納言の会話の中に同音の語を繰り返し連呼させるような仕儀をとらせることが、作者のまた仕組んだ機知になるのではないかと思える。そう思えてきたのは、巻四の引用文よりもう少し後にある吉野姫君と中納言との歌の贈答の場面で、吉野姫君が「見も果てで別れやしなむと思ふかなかたみにかかるかたみと思ふに」という歌をよむ場面があり

（三六七頁）、そのことが契機となっている。「かたみ」が「形見」と「互いに」との掛詞になることは和歌の修辞法であり、ひろく知られていることである。（例えば最近のものでは、神作光一氏編『八代集掛詞一覧』にも用例が多く引いてある。）「かたみにかかるかたみ」とはまさに「かたみ」の両義を効果的に、かつ韻律的にも戯歌風に詠み込む修辞法ではないか。効果的に用いていることには異論のないことであろうが、戯歌風という点には異論もあろう。それこそが特殊な会話としての機能をもつ和歌の効果的な用い方であるとも解せよう。ただ引用文での用法に関してのみ言うならば、「かたみ」は「ゆかり」と同等の価値を有する重要な鍵語である。中納言の言葉には「かたみに（オ互イニ）」唐后の「かたみ（形見トシテノ若君）」を見守っていきたいと間接的な愛情告白をしているとも理解されるのである。重要な語を「互いに」という副詞から抽象的な「形見」という語へ繋いでいく語り口は見過ごされやすいことのようではあるが、中納言の巧みな機知と捉えていいのではないかと思う。このあとに二人が交わす贈答歌に「夢のゆかり」が中心に据えられていることから、「かたみ」はまさに「ゆかり」を引き出す語としても機能していたのである。

式部卿宮の反応

さきに引用した松尾聡氏の可笑味に関する論考中に「『中納言と式部卿宮』との間に交わされた唯一の可笑味」として引かれているのは、巻四（二三）の「式部卿宮来訪。中納言を羨み、女性談義」の項で、式部卿宮が中納言の行動を聖人君子なのは表面だけではないのかと言ったのに対して、中納言はこれを肯定し、「した（中身）は凡夫なるぞ」と軽くいなした箇所である。松尾氏は「大体ある和かさをもつた機智で」はあるが、源氏物語に比して格段の見劣りがすると述べておられる。巻三での中納言の帰朝報告に対して「さる人々を見置きて、われならば帰らざらまし」（二六八頁）とも言って羨ましがることもあったように、式部卿宮は相手が中納言であれば存分に軽口がたたけ

るのであろう。ここでも式部卿宮は「さもありぬべきあたり聞けど、また近劣りするぞや」と諧謔とも滑稽とも思える発言をしている。このあたりの記述までも含めて可笑味とみることはできるように思う。

衛門督北の方の容貌

今井源衛氏は源氏物語のユーモアの諸相について具体的に個々の例を説かれた中に、人物の外形と心の滑稽さの点に触れ、「道化の役割を完璧に果」たしている末摘花を典型的な例としてあげておられる（『源氏物語への招待』九五～九七頁）。浜松にはこれに相当する人物はいないように思われるものの、巻五（六）「帰途、衛門督先妻宅を垣間見て感慨深し」の箇所で、中納言が「築地のくづれより明けぐれの霧のまぎれ」から衛門督の北の方のわびしい暮らしぶりを垣間見る条での北の方の容貌描写が、あるいはこれに適うように読みとれるのではあるまいか。

ほのぼのと見ゆる人ざま、細やかにいやしかるらむとは見えぬものから、面長にいと白うなどあるべかめりと見ゆるに、思ひよそへ寄りたる人の御おもかげに、たとしへなう、つゆばかりかよひたるところなかりけり。（三九二頁）

「思ひよそへ寄りたる人」である吉野姫君とは全く似通っていることはなかったとある。上品で面長で色白な様子が「つゆばかりかよひたるところなかりけり」によって全く逆効果として作用し、衛門督に捨てられるのももっともだと中納言に妙な合点をさえ付加しているのである。ただ、これをたんなる滑稽と判断するにはいささかの抵抗感はある。このあとに中納言は自分なら捨てたりしないだろうとしきりに同情していて、むしろあわれな女性の落魄した姿とみることもできそうであるからである。しかし、そうだからこそよけいに衛門督の北の方の容貌が気になってくるのである。「たとしへなう、つゆばかり」という全面否定の背景に末摘花の扱いに通うものを読みとり、それをあえて朧化させた記述ではないかと考える。

他の平安末期物語に比して浜松中納言物語の表現はあまりに深みがないと言われている。源氏物語を読んでいる者にとってその評は十分すぎるほど適切なものではあろう。しかし、子細に文言を眺めてみ、また視点を異にしてみるならば、案外思いがけない記述にでくわすのではなかろうか。宮下清計氏や松尾聡氏、池田利夫氏らによって深められた注釈作業に学び、さらに最近の諸論考を参考にしつつ読み継いでいかねばならない。

（付記）本稿は浜松中納言物語の全注釈作業の手控えの中から、全文の掲載できないものを部分的に綴り合わせまとめてみたものです。